今日は再び来らず

城山三郎

講談社

講談社文庫

今日は再び来らず
城山三郎

昭和56年6月15日第1刷発行

発行者　三木 章
発行所　株式会社講談社
東京都文京区音羽2-12-21
電話　東京（03）945-1111（大代表）
振替　東京 8-3930
デザイン　亀倉雄策
製　版　豊国印刷株式会社
印　刷　豊国オフセット株式会社
製　本　株式会社若林製本工場

© Saburo Shiroyama 1981

Printed in Japan

0193-317007-2253（0）　定価300円

落丁本・乱丁本は、小社書籍製作部宛にお送りください。送料小社負担にてお取替えします。

今日は再び来らず

城山三郎

講談社

目次

第一章　招かれざる客　七
第二章　独立の条件　二一
第三章　潑剌たる野心　二七
第四章　高学歴低学力　四二
第五章　勉強集団　六八
第六章　多士済々　八五
第七章　異様なこと　一〇四
第八章　激減の冬　一二三
第九章　檄ふたつ　一四二
第十章　独身送別会　一六七
第十一章　転勤の季節　一九七
第十二章　覇気満々　二三九
解説　小中陽太郎　二三九
年譜　二四五

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

今日は再び来らず

第一章　招かれざる客

階下で電話のベルが鳴った。

下宿のおばさんが出て、すぐ笑い声になる。親しい知人からなのであろう。また長電話がはじまると、津島が首をすくめたとき、急に声が二階に向かってきた。

「津島さん、お電話。福原さんからよ」

津島は苦笑した。津島とは対照的に社交家の福原である。おばさんに対しても、まず気軽に冗談でもいったのであろう。

風もない小春日和の正午近い時間であった。津島も福原も、二人そろって希望の銀行の最終選考をパスし、あとは採用内定の通知を待つばかり。人生そのものが春めいて見える思いのひとときであった。

津島は、不自由な足に気をつかいながら、急な階段を下りた。軽い用件の電話と思った。それが、せっかく開きかけた運命を変えてしまうきっかけになろうとは、考えもしなかった。

「おい、たいへんだ。ほんとに、たいへんだ」
受話器をとると、いきなり、福原の大声が耳にとびこんできた。
津島は、笑いを残したまま、顔をしかめた。福原は、万事、大げさな男である。一のことを、三にいう。福原にいわせれば、情報氾濫の時代だから、三にいって、ようやく一の重みで伝わる、とのことだが。
もっとも、このときの「たいへんだ」は、あとから思えば、たしかに、重大な結果になった。
福原は、声を落として告げた。
「先刻、銀行から変なやつがやってきた」
「変なやつ？」
「興信所の調査員だ。銀行にたのまれて、自宅訪問にきた、というんだ。一種の身上調査だ。いろいろ訊いていったが、とにかく、来る早々、本棚を見せろ、といってね」
津島は、自分の顔色が変わるのを感じた。
「……それは、しかし、一種の思想調査じゃないか」
「まあ、そうだな」
「それで、きみは見せたのか」
「見せるより仕様がないだろう。それに、おれのところは、危ない本は置いてない。いや、白状するけど、その類いの本は、いち早く疎開しておいた」
津島は、その答にも、唖然とした。
「なんだ、きみは事前に知っていたのか」

「おれは早耳だ。その種の情報に、抜け目はないよ」
「それなら……」
〈なぜ、早くおれにも……〉といいかけるのを、津島はのみこんだ。
高校から大学まで同じ。友人の少ない津島にとって、福原は無二の親友といっていい。水くさいと思ったが、考えてみれば、親友同士ではあっても、いまは同じ銀行をめざす競争相手でもある。自分だけ有利になっておきたいと、魔がさすような気持になったとしても、ふしぎではない。
ただ、福原は自分が訪問されたあとになって、ふたたび友情にめざめたというのであろう。それに、福原は津島に対して、友情だけでなく、人生の借りのようなものも、あるはずである。
「刑事くずれみたいな、しょぼくれた中年男だったが、誘導して訊き出したところでは、今日、その興信所の調査員たちが、いっせいに手分けして、最終選考合格者のところを回る、ということだ」
黙りこんだ津島の耳に、福原のややかん高い声が流れ続ける。
「思想的な本なんかは、すぐ隠すんだ。たのんで隣りの家、いや、隣りはやばい。先に訊きこみに行く心配がある。どこでもいい、とにかく疎開させろ。それも、急いで」
津島は、ゆっくり首を横に振った。体の底の方から、怒りがふき上げてくる。
「本まで調べるなんて、失敬だ。僭越じゃないか」
「おれもひどいと思う。ただ、あの銀行は、組合問題でひどく手こずっている。だから……」
「それにしたって、自由というか、プライバシイの侵害じゃないか」

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

福原は一瞬黙ったが、すぐ口調を変え、
「いまは議論している段階じゃない。とにかく方便だ。人生、方便を考えたくなけりゃ、生まれて来ない方がいい」
「……」
「いいか。目をつむって、すぐ危険な本をかたづけろ」
「いまさら、かたづけろといったって……」
口重くいいかけてから、津島はふと思いついて、
「仲はいいのか。あいつには知らせたのか」
同じ大学から、もう一人、最終選考をパスしている男のことを案じたのだが。
「あいつは大丈夫。ずっと教育ママに管理されてきた受験秀才だから。本棚には、テキストと指定参考書以外、置いてない。あるとすれば、碁の本ぐらいだろう」
碁は、構想力など頭脳を訓練するのに役立つというので、子供のころから仲が母親に許された唯一のあそびであった。高校までの間、テレビでも、ニュースと碁の番組だけは見させてもらえた、という。

電話が切れ、津島は茫然と二階の自室に戻った。
津島たちが就職しようとするZ銀は、アメリカ系の銀行であった。日本の銀行の多くが、求人に当って指定校制をとり、Q大のような二流の国立大学、それも文学部出身者には無縁の存在であるのに対し、Z銀はいかにも実力主義の外資系企業らしく、大きく門を開いてくれた。争議で

大量の解雇者を出したため、例年になく求人数が多い、という事情もあった。そして、そのことが、今度は裏目に出てきたわけである。半年近い争議こそ終ったが、解雇をめぐる法廷闘争は続いており、経営陣が新規採用者の思想について、格別に神経をとがらせることになったのであろう。

津島は畳の上に坐りこみ、二つの本棚を見上げた。

本は、棚の頂上まで横積みになって溢れている。もうひとつ棚を置きたいところだが、床が抜けると、おばさんに反対された。このため、畳の上にも、いくつか本の山ができていた。

調査員の目になって、本をあらためる。危険といえば、反戦運動や平和運動に関する本。ベトナム関係のものもあるし、黒人文学もふくめ、いわゆる反体制の小説も多い。『資本論』こそないが、経済学も少しは勉強したので、マルクス・レーニン主義関係の本もいくつか目につく。

さて、それらを、どこへ、どうやって隠すのか。

津島は気が重かったし、腹立たしい気分がつのるばかりであった。何冊か何十冊かをあわてて抜き出し、どこかへ運ぶ。そのあと、本棚にぽっかり開く空間が、自分の心の中に開けられる穴のような気がした。

津島は、のばしかけた手を止めて思った。

〈なぜ、このままで、いけないのか〉

本を隠すのは、ありのままの自分を隠すことである。ちっぽけな自分。その自分のあの部分を隠し、次にはこの部分を隠し、隠し回っているうちに、最後には、自分というものがなくなってしまうのではないだろうか。

父が戦死したせいもあって、平和には関心があり、反戦デモに参加したこともある。

だが、それは、津島にしてみれば、ごくふつうの市民的関心からであって、反戦の闘士といったものではない。左翼関係書についても、現代に生きる限り、最小限、読まなくてはならぬ本と思っている。

いまの津島にとっての理想の人生とは、思う存分、好きな本が読める暮しということである。その程度の人生さえ、就職する以上、早くもねじ曲げることからはじめなくてはならぬというのだろうか。

隠そうか、隠すまいか。津島は迷った。隠すとすれば、その隠し先はどこか。ことは簡単かも知れぬが、心の中のこだわりは、ふくれ上るばかりである。

それに、津島は福原とちがい、機敏かつ軽快に動ける人間ではない。とにかく腹ごしらえしてからと、近所の食堂に出かけ、昼食をすませて戻ってみると、下宿の玄関に灰色のコートを着た男がいて、おばさんと話しこんでいた。

「このひと、あなたの部屋に入って待ちたいといわれたけど、とにかく、ここに居てもらったのよ」

「……どうも」

津島は目をつむりたい気がした。これであっさり、かたがついてしまった。とり返しのつかぬことになったと、悔いが走った。

「それに、こちら、変なことを訊くのよ。先刻、あなたが外出するとき、何か荷物を持って出なかったか、と」

津島の顔に目を当てたまま、興信所員はうす笑いする。
「わたし見てはいなかったけど、何も持って行きはしなかったよね」
「もちろんです。食堂へ行くのに、荷物が要りますか」
津島は強い声でいってから、興信所員に向かい、
「部屋へ通すのをことわったら、どうなりますか」
「どうもなりません。ただ、そのように銀行へ報告するだけです」
「……」
「さあ、どうされますか」
詰め寄るようにいわれ、津島は下唇をかみしめながら、小さくうなずいた。決定的な破局を少しでものばそうという気持が、最後に働いた。

興信所員は、とりとめのない質問をしながら、忙しくメモをとった。津島の答だけでなく、書名も書きとっている。ときどき、本棚に目をやって、
「弱りましたね。わたしは、見たとおりを報告しなけりゃなりませんから」
「どうぞ」と低い声でいったまま押し黙る津島に、
「実際に、あなたたちが何を読んで何を考えているか、調べようがない。その種の本がないからといって、読まない保証はないし、逆に、あるからといって、読んだことにもならない。それでも、ただ、ある以上はあると報告しなけりゃならないんですよ」
興信所員自身、屈折していた。〈隠せるものなら、隠しておいてくれればよかったのに〉とい

うニュアンスが読みとれた。
興信所にとって、Z銀行は一時期の客という程度で、本気で思想傾向を調べ上げる気になれない。Z銀にしても、真剣にチェックするというより、いざというとき、興信所に責任を押しつけられるという算段なのかも知れない。
〈方便を考えたくなけりゃ、生まれて来ない方がいい〉と、福原はいったが、すべてが建前、すべてが方便だけで動いている。とすれば、津島もすばやく方便として本を隠しておけばよかったのであろうか。

津島の報告に、電話の向うで、福原はあきれたようにいった。
「いやはや、純情というか、バカというか。一途というか、がんこというか」
津島は無言。なぜもっと早く教えてくれなかったのか。それなら、処世の知恵が働く余地があったのに、と。
福原はしゃべり続けた。
「しかし、考えてみりゃ、きみは扶養する人間がいない。男一匹、家庭教師やってでも、食って行けるからな」
津島が不採用になるものと、きめこんでいる。苦笑したまま、きき流していると、
「死体洗いなんかやれば、半月は食えるからな」
大学病院で、死人を裸にし、うすいホルマリン液で毛穴まで洗って、解剖用に準備する作業を二人でやったことがある。いい収入にはなった。

「情報に金をかけてあるから」といって、ときどき、その種のとんでもないアルバイトを見つけてきた福原であった。老母と弟妹三人を一人で抱えてきただけに、生活力がある。学生時代に家を建てたほどで、学業とアルバイトと、どちらが本業なのか、わからぬほどであった。

早くから進学塾を経営していたし、塾相手の教材や通信をつくって売り歩く仕事もやっていた。津島がけがをしたのも、福原にたのまれたそのアルバイト中の交通事故によるものであった。

「落ちたら、しかるべき職を世話してやるよ」

福原はしゃべるだけしゃべったあと、電話を切った。

不安は適中した。

津島はZ銀行に不採用になったが、福原まで同じ運命をたどった。ただし、福原の場合、思想問題でなく、派手にアルバイトをやっていたのが、たたったようであった。

二人とも、他に就職先のあてはなかった。最終選考まで残って油断していたためというより、Q大文学部へはもともと求人が少なかった。

津島は、とりあえず大学院に籍を置くことにした。

就職に失敗して心にもなく修士課程に進む仲間がすでにかなり居た。そこでは、向学心の強い津島は、むしろ良質の学生といえた。ただし、生計の道は別に考えねばならない。いや、考える必要はなかった。福原が押しかけてきていった。

「塾をやれ。塾ならまちがいない。どんな時代でも、本屋と花屋と塾だけは強い」

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com